ポストモダンエレジー参拾九回目

語りきれない風景

YUKIO KAWASAKI

川崎ゆきお

観光地で写真を撮ると、パンフレットに載っていそうな写真になる。しかし、これはそう感じるだけで、実際には「絵はがき写真」は簡単に写せるものではない。

時代劇のオープンセットが三百六十度展開しているような場所でカメラを向けると、誰が写しても同じような絵になってしまう。

ところが絵はがきやパンフレット写真と同じにならないのは、その場所を最大限に活かす構図や露出を引き出していないからだ。カラーの場合、特価のネガフィルムで、色目など気にしないで、簡単に写している。

それでも一見して、同じように見えてしまうのは、同じ場所を写しているためだ。それに観賞する側は、何が映っているかを重点的に見るため、同じものが映っていたら、同じ写真だと感じるだろう。

そこから先の違いを詮索しだすと、普通に写真を観賞する次元から離れてしまう。

フィルムの感度ではなく、見る側の感度が問題になる。これはソフトなものだけに、どうとでも解釈できる。

音楽が分からない僕にとって、同じピアノで、同じ曲を違う人が演奏しても、全くその違いを認識できない。音では分からないので、演奏者の表情と

か仕草で、違いを見いだすしかない。

まあ、僕らは目だけでものを見、耳だけ音を聞いているわけではないので、解釈の仕方も違ってくるのだろう。

このあたり、かなり面倒臭いので、深く追求していくと、逆に歩けなくなる。

さて、先日行った京都太秦東映映画村は、一種のレトロ地帯だった。

明治時代や江戸時代のオープンセット内を歩いていると、作り事の裏側を見てしまった感じで、ちょっと残念であるが……。

でも、日常とは違う風景が、展開しているのだから、そこを歩いているだけでも、日常からの離脱感が味わえる。一走りすれば、江戸の町並みも、すぐに抜け出せるので、異空間を彷徨い続ける危機感はない。

それよりも、映画のポスターやスチール写真を見ているときのほうが、トリップ度は深かった。そこにドラマというもう一つの嘘が重なるためだ。オープンセットには物語はないが、一枚のスチール写真にはそれがある。まとまりのある幻想の塊が、びっしり詰まっているような錯覚を受けるのだ。

音楽も、映画音楽なら僕も何とか理解できる。具体的なドラマが演じられている背景で聞こえていた音なので、その音を聞くと、映画のシーンが蘇る

のだ。

　でも、ミュージカルになると話は別だ。演技が不自然なので、感情移入の線が繋がらない。

　と、言うことは僕は、抽象的なものに弱いことになるが、決してそうではなく、書く側としては抽象的な模様を書くのは楽だ。それは、意味のない抽象を書くほうが画力は問われないし、作業が単純なので、他のことを考えながらでも書けるからだ。

　現実と非日常、具象と抽象……この種の分け方は、分け方自体に問題があるのだが、非常に分かりやすい。分かりたがっている人には重宝する分け方であり、把握の仕方である。

　しかし現実はそれほど簡単な仕組みで出来ていない。絵はがき写真になりかけの絵はがき写真が延々と続いているような世界である。そこにはまた別の要素が顔を出し、絵はがき写真では括れない現実が展開している。

　括れないと不安なので、僕らは括りたがる。括ることによって方向性を示そうとする。その裏で働いている意志こそが問題なのだ。

　意志が絵柄を作ってしまう。絵の場合それがはっきりと出るが、写真では出にくい。そこが実に面白いところで、ベースを変形できないところに、醍醐味がある。どんな写し方をしても、ど

んな機材を使っても、そこに現実がなければ映らない。その現実は、写真の現実ではなく、本当の現実である。まあ、それはレンズやフィルムや印画紙がとらえた現実なのだが、目の前にあったであろうものを推測しやすい。

　写真が面白いのは、生乾きの現実を背負っているからで、この現実は、巧みな嘘よりも、遥かに神秘的で遥かに奥が深く、遥かに奇想天外なのだ。

　しかしそれは写真の表面からは見えにくい。そこが写真の憎いところだ。表面は絵なのだが、その絵が指す現実と繋がっている。

　普通の絵やイラストは、見る側の個人的な現実と繋がり、写真は一般的な現実と繋がっている。

　ここでいう一般的な現実とは、その人が思っている世間一般の現実で、本人さえも伺い知れない現実である。フィクションはそこで終わってしまうが、現実はもっとマルチで、膨大な広がりを持っている。それだけに、これは語りきれない世界なのだ。

〈川崎ゆきおホームページ情報〉
幻想長編小説「綾乃」掲載中。
単行本一冊分のボリューム。
ダウンロード無料。
http://www.asahi-net.or.jp/~ww8y-kwsk/